

るけ於に上地
涯生御の主

■傳小の督基■

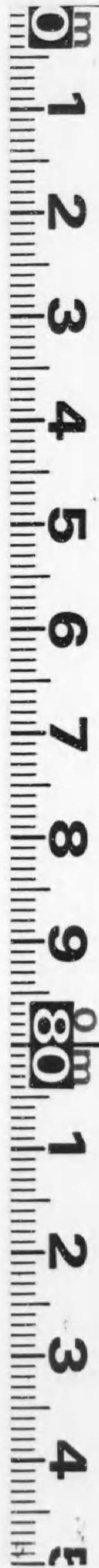
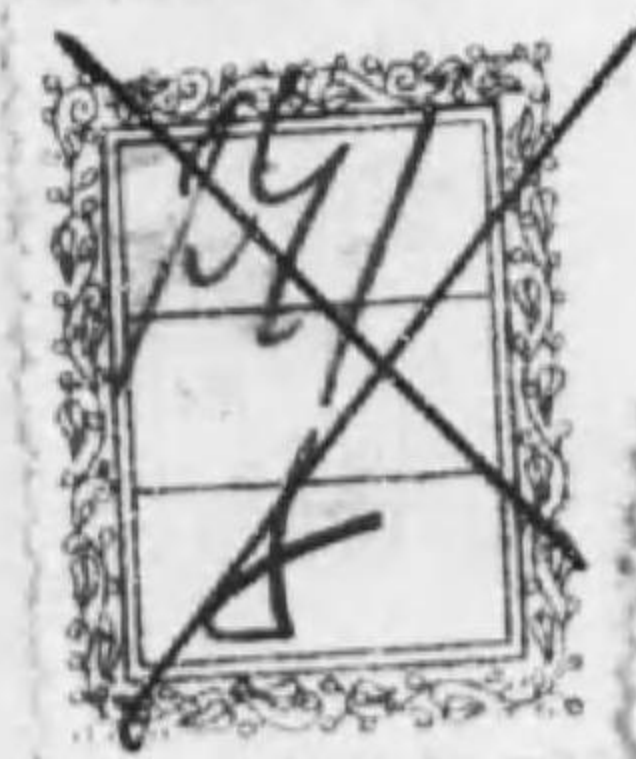


特III

47

京東

出日



始



持111

47



地上に於ける主の御生涯



はしがき

キリスト傳は日本語でも澤山に出て居るが、或ものはあまりに大冊であり、或ものはあまりに學究的であり、又或ものはあまりに小説的であつて、聖書の材料に忠實なそして要領を得たものが少い。本書はキリスト傳の唯一の資料なる四福音書の物語を歴史的の順序に従つて、一讀直ちに了解の出来るやう簡単に書き記したものである。かゝる小冊子の必要を感じて居る人々の要求を幾分でも満たすことが出来れば編者の幸之に過ぐるものがない。

本書は元來、エリー神學院長ランドルフ博士の "The Earthly Life of our Lord" を織笠繁藏氏が翻譯されたものであるが、現在の形として出版した責任は全然編者の負ふ所である。

(1)

大正十一年七月下旬

日本聖公會出版社編輯員

地上に於る主の御生涯

目次

一 施洗者ヨハネ	一頁
ザカリアとエリサベツ	一頁
蒙告と往訪	四頁
施洗者ヨハネの誕生	六頁
二 主の降誕とその少年時代	八頁
降誕と牧羊者の來訪	八頁
割禮と宮謁	一〇頁
博士の來訪とエジプトへの避難	一二頁
十二歳の時の宮謁	一五頁

三 宣教の第一年

受洗 一七

誘惑 一九

最初の弟子 二二

カナの婚筵 二四

宮を潔め給ふ。ニコデモとの對話 二六

サマリヤの女 二八

貴人の子を癒し給ふ 三〇

四 宣教の第二年(上) 三二

ベテスダの地の中風患者 三二

ナザレにて棄てられ給ふ 三四

大漁の奇蹟 三七

ガリラヤ巡廻。マタイの召命 三八

五 宣教の第二年(下)

使徒を召し給ふ。山上の垂訓。奇蹟 四二

罪人なりし婦 四五

鬼に憑かれるガダラ人 四七

ヤイロの娘。血漏に悩める婦 四八

六 宣教の第三年(上) 五一

再びナザレにて棄てられ給ふ 五一

施洗者ヨハネの死 五二

食を五千人に與へ給ふ 五三

サイロピニケの女 五七

聖ペテロの告白 五九

七 宣教の第三年(下) 六二

變容貌 六二

假廬の祭	六六
宮潔の祭	六八
八地上に於ける最後の週間	七三
エルサレム入都。ユダの裏切	七三
九受難より復活まで	八三
審問。十字架。死。復活	八三

挿畫	八
1 牧羊者の來訪	一六
2 十二歳の時の宮講	二六
3 宮を潔め給ふ	七〇
4 幼児を祝福し給ふ	八七
5 主の審問	九一
6 復活のキリスト	九一

地上に於る主の御生涯

一 施洗者ヨハネ

ザカリアとエリサベツ

イエス・キリストの地上の生涯を辿らんとすれば、吾人は聖ルカの傳へし福音書の如く、「主の道を備へ」(路三〇四)ん爲に遣はされたる施洗者ヨハネ生誕の記事を以て始めねばならぬ。ユダヤの山里にザカリアといふ老ひたる祭司とその妻エリサベツとが

住んでゐた。共に敬虔な人であつたが、未だその家庭を賑はす子がなかつた。

福音史の始まる其の當時ザカリアは殿の奉仕をするためにエルサレムに登ることに成り、又聖所の黄金の聖壇に香を焼く籤に當つた。これは祭司の一生に一度あるかないかといふ至極名譽な任務であつた。

されば金の香盒を聖所に捧げ行きし時、ザカリアは祈禱に畢生の祈願を集めてゐたことと信ずる。

彼が香を供へて居る時に、突如として天使の幻が現はれ、彼の祈禱は聞かれて、妻エリサベツは男子を與へらるゝこと、その名をヨハネと呼ぶべきこと、長く待ち望まれたるメシヤの先驅となり、「整へたる民

を主の爲に備ふるものとなるべき歡喜の音信を告げた。

ザカリアは此使者の神より遣はされたるガブリエルなることを告げられたけれども妻も自分も既に齡傾ける故に、初めその約束を疑ふた。

そのため彼は啞者とされた。

民はその時祭司が此く久しく宮に止まれるを怪しと思ふたが、その出づるや、その慣例たる祝福をさへ與ふる能はず、只首を以て示すのみなるを見て驚いた。かくて民は彼が異象を見たといふ事を了つた。

當番の週間の終りに彼は己が家に歸つた。天使の約束の如くエリサベツ孕りて其家に隠れ居りしこと五ヶ月（路一〇廿四）であつた。

蒙告と往訪

四

ザカリアに現はれし後六ヶ月にして、天使ガブリエルは更にガリラヤにてナザレと呼ばれたる寒村に遣はされた。偕其處にダビデの裔でエダの王族に屬し、エリサベツと縁續きなるマリアと名くる卑しき處女があつた。彼は大工のヨセフとて、是又王族なりし人と婚約があつた。そのマリアに、天使は、聖靈の力にてイエス（エホバ救主）と呼ばるゝ子の母となるべく、その子は偉なるものとなり至高者の子と稱へらるべき由の御告を傳へた。此奇しき召命に對して、マリアは柔和に「視よ、我は主の婢女なり、汝の言のごとく我に成れかし」と答へた。

ガブリエルは彼の従姉エリサベツの身の上にありし事どもをも語つたので、マリアは直にエダヤの山里に彼女を訪ねんとて四五日路の旅に打ち立つた。エリサベツの家に着いて、その敷居を跨ぐや否や、天使の言の確かなるを信じた年老ひたる彼女は「わが主の母われに来る、われ何に由りてか之れを得し」（路一〇四十四）と云ふた。マリアはエリサベツの問安を聞くや、讚美と感謝と聖き語が口を突いて出た。それは全世界の公會が日毎に唱へ、基督者の心には非常に親しみのある「聖なる處女マリアの頌」（祈禱書七十七頁）である。

エリサベツと共にあること三月ばかりにして、マリアは再び家に歸つた。やがて聖なるヨセフは彼の孕めるを知りしも、「正しき人」（太一〇

五

十九) — 嚴格に律法を守る人—なりしかば、事を公にするを好まず、私かに彼を離縁せんとした。そして静かに慮ひ回らして居ると、「その胎に宿る者は聖靈に由る」(太一〇二十)ものにして、世の救主の生れんと近きにありとの天使の告を受けた。

六

施洗者ヨハネの誕生

やがて老ひたるエリサベツは一男を擧げた。そして第八日に割禮を受けんとして祭司の下にその子を携へて行つた。その際縁者等はその父ザカリアの名を繼がしめんことを願ひしも、エリサベツはヨハネと名けんと言ひ張つたので、訝りつゝも人々は物言へぬザカリアに如何したもののか

と質した。すると彼は寫字板に「その名はヨハネ」と書いた。その時より彼の口開け、感謝の歌は口を突いて出で、「主の道を備ふ」る任に立てられた我が子の後世偉いなるものとなることを預言した。此歌は「ザカリアの頌」として聖公會の早禱の一部となつてをる。

その子は長ずるまゝに、「その靈強くなり」、天使ガブリエルの命ずるところに従ひて、嚴格にナザレ人(特にその身を神に献げた人)の誓約を行ひ、葡萄酒と濃き酒とを飲まず、若くして、古の預言者の衣—駱駝の毛織物を着、腰に革の帯をつかね、死海の畔なる荒野に退き、其處に出来る蟪と野蜜を食べて、イエラエルに顯はるゝ日まで居た。

七

二 主の降誕とその少年時代

降誕と牧羊者の來訪

八

紀元前四
年十二月

此時代は四海萬國波風なく、羅馬帝國一般に國勢調査、
即ち戶籍調の詔が出た。ユダヤの風習では、人民は各
その先祖の郷土で登録するのであつた。そのためヨセフ
とマリアはベツレヘムに旅立たねばならぬことになつた。目的地に着く
と、古い傳へによれば其地方に夥しくあつたといふ洞窟の一つ、家畜
の入れてあつた所に一夜の宿を求めねばならぬほどに旅舎は混雜してゐ



訪來の者羊牧

た。この憐れな卑しい境遇の中で、救主は生れ給ひ、母は『これを布に
裹みて、槽に臥せた』。

小さな村のベツレヘムの近郊に、羊の群の夜番をして居た數名の牧者
が居たが、その時急に主の天使が現はれ、『主の榮光その周圍を照した』。
恐怖に一度は慄いたものゝ、直ちにその人々は天使により『懼るな。
視よ、この一般に及ぶべき、大いなる喜びの音信を我なんぢらに告ぐ、今
日ダビデの町にて、汝らの爲に救主うまれ給へり、これ主キリストなり』
と告げられた。そして確められた徴は『汝ら布にて包まれ、馬槽に臥を
る嬰兒を見ん』といふことであつた。天使が言ひ止むと衆くの天軍が
その場に現はれて、信者には極く親しみある懐かしい『いと高き處には

十
榮光神えいこうかみにあれ、地ちには平和へいわ、主しゆの悦よろこび給たまふ人ひとにあれ』或あるひは「いと高たかき處ところには榮光神えいこうかみに、地ちには平和へいわ、人ひとには惠めぐみあれ」との歌うたを以もつて夜よるの空そらの靜寂しづけさを破やぶつた。此この幻象まぼろしが消きえるや否いなや、牧者等ほくしやたちは急いそぎてベツレヘムに到いたり、マリヤとヨセフ、及び馬槽まぶねに臥ふせるその嬰兒みどりこを尋たづねあてた。そこでその人々ひと々もその傳つたへられた喜よろこびの音おとづれを人々ひと々に言いひふらし、聞きける人々ひと々は皆みな心こころに驚おどろいた。『マリヤは凡すべて此等これらのことを心こころに留とどめて、思おもひ回まはせり。』

割禮と宮謁

『律法おきてに隨したがひて生うまれ』たれば、降誕かうたんご後か八日かめ目に御子みこはその律法おきてに服したがひて割禮かつらいを受け、又またマリヤへの御告通みつげほほりにイエスと名なづけられ給たまうた。

四十日にちめ目に又またユダヤ人よどの律法おきてに從したがひて嬰兒みどりこは宮みやに献ささげられた。その時とき處女ととめマリヤは貧まづしき禮拜者らいはいしやの規定通さだめほほりに、『斑鳩やまばと一對つがひあるひ或いはばどは家鴿いへばとの雛ひな二羽に』の卑いやしき献物さしげものを供そなへた。この宮詣みやまじは御子みこのメシヤたる著いちじるしき二の證據しょうこの現あらはる、機會きくわいとなつた。シメオンといふ名なの一老人いちろうじんあり、此この者ものは『イスラエルの慰なぐさめられんことを待ち望のぞみ』、『主しゆのキリストを見みぬらちは死しを見みず』との御告おつげを受けてゐたが、イエスとマリヤとヨセフとが宮みやの境内うちに進すすみ來きたるを見みて、このマリヤの子ここそ、永ながく待まち望のぞめる者もの、主しゆなるメシヤ(即すなはちキリスト)なれと識しり、我わが手てに抱だきとりて、『シメオンの頌しょう』なる誰たれも知しれる『主しゆよ、今いまこそみ言ことばに從したがひて、僕しもべを安やすらかに逝ゆかしめ給たまふなれ』との言ことばを以もつて滿腔まんこうの喜悅よろこびを吐露とろした。

もう一つの證明はアセルの支流のアンナと云へる女預言者の爲たものである。彼女は高齡に達した人で、結婚生涯七年の後、八十四年の間寡婦であつたが、その間絶えず宮にあつて、斷食と祈禱をもて日夜神に事へた。彼女もシメオンのやうに、その言は傳らないが、『神に感謝し、又凡てエルサレムの贖を待ち望む人に、幼兒の事を語』つた。

博士の來訪とエジプトへの避難

シメオンとアンナとが聖都に居た禮拜者にメシヤの降臨を告げ示せしころ、『順禮者、崇拜者は遠き國より近づいて來た』。東方の或る國より博士等エルサレムに來り、ユダヤ人の王として生れ給ひし者何處に在すぞ

と尋ねた。彼等は東方で『その星』を見たので、彼を拜せんとて來たのである。

ヘロデ王は猜忌心を起して、祭司長と學者達に商つた。するとその人は、ユダヤのベツレヘムをメシヤの生るゝ處とせし預言者ミカの言を以て答へた。乃ちヘロデは博士等をベツレヘムに遣はし、『之にあはゞ我に告げよ。我もまたゆきて拜せん』と命じた。

星は再び現はれて博士等を嬰兒の臥せる處に導いた。彼等嬰兒を見るや跪いて拜し、己等の國より携へ來りし寶(黄金、乳香、沒藥)を献じた。かくてその志望を果したが、夢にヘロデの許に歸るなどの神の御告を蒙りたれば博士等は他の道よりその國に向ふた。此くヘロデは王とな

るべき嬰兒の果して何れなるかを突留めんとの計劃の妨げられたれば、ベツレヘムの近隣に見えたる二歳以下の男子を悉く屠れとの命を出した。けれどもヨセフは夢に神の御告を受けて、既に母と子とを連れてエジプトに遁れた。

此聖なる家族はヘロデ死亡の報知が傳はりしまでエジプトに止りて、それからバレスチナに歸つた。最初の計畫ではヨセフはベツレヘムに居をトせんとしたらしい。がアケラオがヘロデの後を嗣いで支配せることを聞きて、その領地に行くことを恐れた。そして更に神の御告を受けたので、ナザレの舊居に引退した。幼兒は『やゝに成長して、健かになり、智慧みち、かつ神の恩寵その上に』臨つた。

十二歳の時の宮謁

キリストの幼年の時から傳道を始めらるゝまでの一時期は、全體に厚い黒幕を以て蔽はれ、唯一個の出來事のみが記録されてをる。ヨセフとマリアは毎年エルサレムに上る習慣であつたが、御子は最早十二歳に達した。この年輩になればユダヤ人の子弟等は商賣を習ひ始め、『律法の子』となるのである。兩親は其の年に過越の祭に彼をエレサレムに連れて往つた。

此の祝會終りて順禮者の隊が歸途に就いたが、御子は見えず、道連れの中の知音などの間を空しく探し索めた揚句、ヨセフとマリアは聖

都こに戻もどつて見みると、彼かれが宮みやの中うちにて博はく學がくな教ち師じ達たちの中うちに交まじりて互たがひに問とひ答こたへなどし給たまふを見みつけた。母ははは先まづ彼かれを見み失うしつた心しん配ぱいを啣かちしが、彼かれは自おの己れの神しん性せいを自じ覺かくせるを明あきかに示しめしてをる言ことばで、『何なに故ゆゑわれを尋たづねたるか、我われは我わが父ちちの家いへに居をるべきを知らぬか』と答こたへ給たまふた。かくて彼かれはヨセフ及びマリアと偕ともにナザレに歸かへり、從じゆ順じゆんに彼等かれらに仕つかへしが、その母ははは『これらこれらの事ことをことごとく心こころに藏をさめ』て居ゐた。かくて『イエス智ち慧ゑも身みのたけもいやまさり、神かみと人ひととに益ますく愛あいせられ給たまふ』との言ことばを以もつて、黒幕くろまくは再またび下くだり、以後いごの十八年じゅうはちねんの生い涯やがを隠かくして居をる。



二十歳の時の宮謁

三 宣教の第一年

受 洗

紀元二十
七年一月

主がナザレの家にありしころ、施洗者ヨハネはその幽棲
を出でて、メシヤの爲めに途を備ふる事業を始めた。ユ
ダヤの野に、ヨルダンの岸に、人々彼に聽かんとし又洗
禮を受けんとして群がり來りしほどにも、力強く悔改を説いた。バリ
サイやサドカイの徒、税吏や兵士や、富める人や貧しき人の群が、彼を圍
みて立ち、その燃ゆるが如き言を聽いた。此の人は誰なるべきかと知らず

とする人々の望は切であつた。突然現はれた此の教師は誰であらう。彼はキリストであらうか。或人はキリストだと思つた。或人はエリヤだといひ、或る人はモーセが預言せし預言者だと云ふた。けれどもヨハネは明かに自分はそのうちの誰でもないと告げ、『我は野に呼べる人の聲』で、我は唯來るべき者のために道を備ふる者に過ぎない。此く云ふ我は悔改むる者に水を以て洗禮を施すものだが、來らんとする者は『我よりも能力あり、我は其履の帶を解くにも足らず、彼は聖靈と火にて汝らにバプテスマを施さん』と人々に宣言した。

ヨハネが傳道を始めから凡そ六ヶ月程と思はるゝ頃、イエスはヨハネより洗禮を受けんとて、ナザレを後にし、ヨハネが説教したるエダヤ

に來りたまふた。けれどもヨハネは『我は汝にバプテスマを受くべきものなるに、反つて我に來り給ふか』とて辭んだ。キリストは答へて『われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは當然なり』と云ひ給ふた。ヨハネは最早躊躇せず、そしてイエスが洗禮を受けて水より出で祈りしたまふとき、彼がメシヤたる一の徴が與へられた。天開かれて、聖靈鳩の如き形をなして降り、『其上に留り』、又同時に『此は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』といふ聲が聞えた。

誘惑

受洗の後誘惑が來た。『御子は天の甲冑を受けて、今やこれを證せんと

て出で往けり』。聖靈に充されたるキリストは悪魔に試みられんとて、その同じ聖靈に導かれて、ユダヤの荒野に來たまふた。四十日四十夜の斷食をして疲勞し衰弱するに及んで、彼を日ごろ攻めつけてゐた誘惑はその頂點に達した。

第一の誘惑はその周圍の石をパンとすべきことであつた。

神の保護を疑はしめんとする此の試みに、イエスは申命記の一節を以て應じたまふた。曰く『人の生るはパンのみに由るにあらず、神の口より出る凡ての言に由ると録されたり』と。

第二の誘惑に於て、主は靈にてエルサレムに携へられ、殿の頂上に立され、悪魔の引用した聖書の句（重要な箇所を省略したる）に、神の保

護を約束せられたるものとして、その身を下に投んことを命ぜられたが、イエスは再び試みるものを卻け給ふた。主は神の恩を臆測し給はなかつた。『主たる汝の神を試むべからずと亦録されたり』。更に重ねて悪魔はその攻撃を新に起した。今度の場所は或る高き山の頂上で、そこからは瞬く間に、『世のもろもろの國とその榮華』とを展望することが出來た。サタンは若し主が跪きて己を拜せば——悪と聯盟する誘惑——これらのものを總て主に捧げんと云ふた。是は第三の誘惑である。このときも主は前の如く同じ聖書からとつた言葉でまた試むるものを斥けたまふた。『サタンよ退け、主たる汝の神を拜し、惟之にのみ事へ奉るべしと録されたるなり』。かくて悪魔『暫く』彼を離れ、『視よ、御使たち來り事へぬ』。

最初の弟子

二十二

誘惑の後主はヨルダンの畔に歸りたまふたらしい。ヨハネは未だ其處で洗禮を授け、又「我が後に來る者、……我は其履の紐を解くにも足らざる」者のために證をなしつゝあつた。彼その目を擧げて、イエスの此方に來るるを見て云ふ、「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」と。此の驚くべき證は、翌日復たヨハネの二人の弟子の前でも繰返へされた。その弟子はそれを聞くとイエスに従ふた。

その一人はアンデレで、他の一人は名が擧げられてゐないけれども、恐らく福音記者ヨハネであつたらう。イエスは二人の従ひ來れるものを

見て、「何を求むるか」と問ひ給ひしに、「ラビ何處に留り給ふか」と答へ、「來れ、さらば見ん」との主の招きの言に、力を得て、彼等は其日の宿りを主と偕にした。

アンデレは直ぐその兄弟シモンに遇ひて、彼れを主の許に携れて來た。主は彼れをケバ（即ちペテロ、「岩」と呼び給ふた）。

次の日イエスはガリラヤ方面に出立ちて、ペテロ、アンデレと同じくゲネサレの湖畔ベツサイダの人なるピリポに遇ひ、従ひ來らんことを命じ給ふた。ピリポは又ガリラヤのカナの人ナタナエルに、我はモーセと預言者達の記せし所のものに逢ふたと物語つた。始めナタナエルはナザレの如き賤しき邑から何の善きものゝ出づべきやと、ピリポの物語るを

二十三

眞にうけなかつたが、『來りて見よ』と云はれて、イエスに來り、『視よ、これ眞にイスラエル人なり、その裏に虚偽なし』との挨拶を聞いた。そこでイエスに『如何にして我を知り給ふか』と尋ねると、主は『ピリポの汝を呼ぶまへに我汝が無花果樹の下に居るを見たり』と答へられた。ナタナエルは驚いて、『ラビ汝は神の子なり、汝はイスラエルの王なり』と告白し、その歸依者の中に加へられ、イエスや他の弟子達と偕にガリラヤへの旅路に上つた。

ガリラヤのカナの婚筵

主がガリラヤに向つて出發してより第三日に主とその五人の弟子と

は、ナザレから程遠からぬ小さな邑カナに着いた。宛かも其處に婚筵があつて一同招かれ、處女マリアは先きに來て居た。彼女がその式に目立つて立ち働いてをるところから見ると、式はマリアの近い縁者の家で行はれたものに違ひない。ヨセフのことが、こゝには記してないから、恐らく此の以前に死んだのであらう。

筵えん 酬たぐはにして、葡萄酒が不足したので、イエスは命じて、入口近くにあつた洗足用の大甕おほがめに水を一杯いっぱいに満たさせ給ふた。そして此水このみづが汲み出されて、饗宴長あむまひがしらに持ちゆかれた時には葡萄酒ぶどう酒に變つて居つた。これはイエスがなせし『第一の徴しるし』にして、『其榮光そのさかえを顯し給ひたれば弟子たち彼を信じたり』とある。

この筵終りて、イエスは其の母及び弟子と偕に、カペナウムに退き、
過越の祭の爲にエルサレムに上るべき時の來るまで、數日の間宿つて居
られた。

宮を潔め給ふ。ニコデモこの談話

第一の過越
紀元二十
七年四月

主がエルサレムに着かれて、第一に行ひ給ふた事は、主
が此の世に成就せんとて來給ひし潔の事業に關する一種
の比喩であつた。宮に往るゝや、主は外庭即ち異邦人の
庭が、犠牲とする家畜を賣るものや、外國貨幣の兩替をするもの等によ
りて宛然商賣の熱巷に一變してをる様を見られた。かゝる瀆らはしき光



宮を潔め給ふ

景は主の義憤を發せしめ、唯一度此の時と、又その傳道の終りに於る同じ様な場合とに主はその力を用ひ給ふた。主は憤を燃やし、「繩を鞭に造り」て賣買するものを逐ひ出し、兩替する者の金を散し案を倒し「わが父の室を商賣の家とすな」と云ひ給ふた。

主の憤に畏縮して宮を潰せし人々は逐ひ拂はれ、主の弟子達は「なんぢの家をおもふ熱心われを食はん」とある詩篇の言を憶ひ出した。

傍にありし人々の中に、主がかゝる事をなし給ふ權能を證する休徵を求めたところが、主は「汝等この宮を毀て、我三日のうち之を起さん」と答へ給ふた。驚くべき言なるかな、當時にありては、主の弟子達すら何の意味たるを知らなかつたのであるが、復活の後、弟子達は主が如此

いひたまへるは『己が體の宮』を指せるなりと悟つた。

ニコデモ
の來訪

聖ヨハネは主がエルサレムを訪はれた此のとき、多くのユダヤ人を心服させた休徴や異能を行ひたまふたと傳へて居る。改宗者の最も著名なものは集議所（ユダヤ人の大議會）の一員で、夜竊かに來りて主に會はんとしたニコデモといふ人である。イエスはこれを引見して、古來凡べての基督教徒が洗禮の聖奠を指すものとする『新生』の秘義を教へ給ふた。主は此く教へたまふた、『人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず』と。

サマリヤの女

此過越祭の後間も無く、施洗者ヨハネはヘロデ（アンチパス）の爲に獄に投ぜられ、イエスはガリラヤに歸へり給ふた。その途中に主はサマリヤを通られたが、弟子達が食物を整へんとて邑に往つてをるうち、ヤコブの井戸の傍に息ひ給ふた。

イエスが疲れてその井戸の傍に坐してをられた時に、一人のサマリヤの女が水を汲まんとして來た。二人の間にかはされた會話の中に、主は、その女に與へんとし給へる『永遠の生命の水』に就いて語り給ふた。主はその女に姦夫あるを知れりと示し、終に己は世の長く待ち望んでゐたメシヤなることを告げ給ふた。主云ひたまふ、『汝と語る我はそれなり』と。

弟子達の歸り來るや、その女は町に行き、我が生涯のことを語りし人を來り見よとて、町の人々を集め、その人々はイエスに逢はんとて來たが、主はその人々の需めによりて、その町に二日止まりて、その語る所を聞いた多くの人々は主が眞に『世の救主』なる事を信ずる様になつた。

貴人の子を癒し給ふ

かくサマリヤに暫時滯留して後、主イエスはガリラヤに歸りて、復カナに行き給ふた。そこに居る間に、二十哩餘を隔つたカペナウムに住める貴き人が、死に瀕めるその子を來り癒さん事を求めた。始めはその『休徵と異能』を見んことを願ふやうな、信仰のまだ充分でないことを戒飭

されたが、終にその人は『かへれ、汝の子は生くるなり』と告げられて歸つた。翌日その人が歸へる途中その僕に會ふた。すると僕は危篤であつた病人の本復を告げた。なほ精しく尋ねると急に快くなつて、而かもそれが『汝の子は生くるなり』と主の言ひ給ひしその時からだと、わかつた。そこでその人もその家のものも總て、信者になつた。これはガラヤに於ける主の第二の奇蹟で、主の傳道の第一年の終りを畫するものである。

四 宣教の第二年（上）

ペテスダの池の中風患者

第二の過越
紀元二十
八年三月

ガリラヤに數ヶ月滞在後、イエスは祝節を守るためにエ
ルサレムに上り給ふた。此は過越祭であつたらうと思ふ。
その頃羊の門に近きペテスダ（恩寵の家）と呼ばるゝ池
で、癒されんとて俟つ群なす患者の中に、三十八年も中風に悩まされて
ゐた人がゐた。主は憐れなこの人を見給ふて、『なんぢ癒えんことを願ふ
か』と問ひ給ひしに、その人は任意ならぬ悲しき物語を以てした。これ

パリサイ
人との第
一の論争

を聞かれてイエスは彼が長い間臥てゐた其の小さな藁蒲團を取りあげて
歩めと告げたまふた。イエスの言はるゝ通りにした其の人は全く癒され
た。此の奇蹟は主の宣教時代に於て殊に重要なものである。何故といふ
と、それが安息日であつたので、學者及びパリサイの徒と公然間隙を
作る始めとなつたもので、彼等は癒されたる人に向つて
律法を破つたことを詰つたが、其の人は床を取りて歩め
といひしはイエスなりしことを語つた。そのため主は親
らその所業の辯明を求められた。此く挑まれたので主は『公然メシヤの
性格と職分とを主張し、我は人類の未來の審判者なりと告げ、此等の主
張を支持するために主は施洗者ヨハネの證明、自身行はれた奇蹟、又モ

一七の書に訴へ給ふた』(マクリア約五〇卅二―四六参照)。此の主張には何等の答もなかつた。此時までは主の傳道はエダヤでもエルサレムでも少なからず氣受けが好かつたのだが、以後形勢は一變してしまつた。されば主は、實際に主を拒むやうになつたエルサレムを去られて、ガリラヤに歸り給ふた。

ナザレにて棄てられ給ふ

エルサレムに於る過越祭後、主はその年の數ヶ月をガリラヤにて説教をなし、教訓をなして過ごされたこと、思ふ。『その長育し所なる』ナザレに行くまで主はガリラヤでは氣受けは好かつたのであるが、ナザレでは

會堂に入り、立ちて以賽亞書の第六十一章を選んで讀み給ふた。そこに『我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣しめ、我を遣はして囚人に赦を得ることと、盲人に見ゆることを告げしめ、壓へらるる者を放ちて自由を與へしめ』と記されてあるのは、聽く者に取つてはメシヤによく當て當ると考へられたであらう。

聖書を讀んで後、主は教をなさんとて坐し給ひしが、その口より出づる恩ある言に人々驚きて、『會堂に居る者みな之に目を注いだ』。けれども主が此の驚くべきメシヤ預言を自身に當て箴め居ることに心づき、又更に預言者は故郷にては尊まれざるものなりと主張し、更に尙聖書によればナアマンとザレバタの寡婦の例でも明らかであるとほりに、神の恩

寵はユダヤ人へのみ限られて居らぬと強く言ひきつた時に、それを聞ける人々の怒は極に達した。彼等は起つて主を會堂の外に引出したのみならず、突落さうとして、『其邑の建ちたる山の崖に』曳いて行つた。けれども人々は主の態度の従容迫まらざる威嚴に打られ、その間を主は平然と通つて、カペナウムに向ひ給ふた。

此時からイエスはカペナウムを第二の故郷と見なされやうである。主は其處にて『汝は神の聖者なり』と大聲に叫んで、會堂の禮拜を妨害した悪鬼に憑かれた人を癒し、次でまた熱を患ふて居た聖ペテロの岳母を癒し給ふた。日の暮方になると、全市の病人や鬼に憑かれた人々を同伴して癒を乞ふた群衆は聖ペテロの家を圍んだ。主はその人々を悉く癒し給ふた。

大漁の奇蹟

その頃、主は岸に近く繫留してあつたペテロの船に坐して人々を教へ給ひし後、シモンに『澳へ出で網を下して漁れ』と命じ給ふた。シモンは暫し躊躇ふて居たが、終にその言に従つて網を下すと、その網が裂けかかる程の大漁であつた。アンデレはヤコブと他の一艘に居た人々と呼んで、その加勢に行つたが、その二艘の船は直に魚で一杯になつて、沈まんばかりであつた。ペテロはイエスの大能の示現に恐懼して主の足下に伏し、聲をあげて、『主よ、我を去り給へ、我は罪ある者なり』と叫ん

だ。主はそれに答へて、シモンや其他の人々にその船を棄て、「人を漁る者」となれと命じ給ふた。職業をそのまゝ、一年以上も主の弟子たりしこの四人は、この時からその職業を棄て、日夕常に主に従ふものとなつたのである。

ガリラヤ巡廻。マタイの召命

主が會堂にて教へ、病者を癒しながらガリラヤの邑々を巡廻なされたのは此の當時のことであつた。その中に最も著しい出来事は、ある中風の人があつて、その友達が主の在す家に入らうとしても、群衆の爲に這入れぬので、仕方なしに屋根から救主の前にその病人を吊り降した

ことである。

パリサイの反抗心増す

イエスに反抗して居たパリサイ人や其他の人々が、恰かも其のころエルサレムから來てガリラヤに居たが、主が病める人に「子よ汝の罪赦されたり」との言をかけた時に彼等は之れをもつて瀆すことを言ふとて呷いた。そこで主は病人に床を取りあげて歩めと命じ給ひ、病人は直にその命に従つた。これを見た人々も神を崇めかつ大いに畏れて、「今日われら珍しきことを見たり」と言ひ合ふた。その少し後にガリラヤ湖畔を歩みゆかれた時に、レビ（又はマタイ）と名づくる收税人の役所に坐し居るを見給ひ、ユダヤ人に卑しまるゝ階級に屬するものではあるが、主は彼を召し、彼も亦その收入

多き職業を棄て、キリストに従ふた。マタイは直ちにその新しい師を招待して祝宴を催したものでらしい。

學者とパリサイの徒が主は罪人と偕に飲食するものなりと吐いたと
きに、主は『健康なる者は醫者を要せず、……我は正しき者を招かんと
にあらず、罪人を招きて悔改めさせんとて來れり』と告げ給ふた。

又或る安息日に主と弟子達とが畑道を通行された時に、弟子達は麥の
穂を摘み始めた。するとパリサイの徒は儀式上の律法を破るものとし
て之れを詰つたので、キリストは『安息日は人の爲に設けられたもので、
人は安息日の爲に設けられたものではない』から、『人の子』は『安息日
にも主』たる事を告げ給ふた。

一週間の後主は又會堂に居られると、片手枯へたる人がゐた。學者や
パリサイの徒は安息日に癒すは律法に合へりやと主に問ふた。主は之
に答へて律法は羊又は牛が安息日に穴に落ちたるを曳き上ぐることを許
すことを告げ給ふた。そして安息日に善をなすと悪しきをなすと、命を
救ふと殺すと、孰れが律法に合へるやと問ひ給へるに、彼等が答へを拒
むや、主は怒を含みて環視し、彼等が心の頑硬なるを憂へ、その人に『手
を伸べよ』と命じ給ふた。すると其手は直に他手の様に満足になつた。
學者とパリサイの徒はその時憤つて、その敵へロデ黨と結び、『如何
にしてかイエスを亡さんと』謀つた。

五 宣教の第二年 (下)

使徒を召し給ふ。山上の垂訓。奇蹟

紀元二十
八年五月

吾人は今や主の地上生活の一轉機に達した。主は是まで唯獨りで居給ふたのではない。少數の弟子等が共に居たのである。しかし何れも永久に主に従ふたものとは見えない。又『その人々は主を首とした』組織せる團體であつたやうにも見えず、説教する判然たる委任を受けてゐたやうにも見えない。今や教會組織の第一歩が踏み出された。この準備として、主は淋しい

山に退き、終夜祈り給ふて、その翌朝弟子達をその許に招き、十二人を選び、使徒と名づけ給ふた。この中、シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ(この二人はポアネルゲ即ち雷の子と今は名づけられて居る)、ピリポとバルトロマイ、レビ即ちマタイは既に前より召されてゐたものである。その他はデドモ(即ち双生兒)と呼ばれるトマス、アルバイの子ヤコブ、その兄弟ユダ、ゼロテのシモンとイスカリオテのユダであつた。嚴かなる此の十二使徒の選任の後、主は所謂山上垂訓と稱する基督教道徳の要領を説かれたものと思ふ。それを終りて主はカペナウムに歸り給ひしが、百卒長のために來りて死に瀕せるその僕を癒し給はんとを乞へる會堂の長老たちに逢はれた。

乃ち主はその家に向ひ給ひし途上、「來り給ふに及ばず、たゞ一言を發し給はゞ僕は癒えん」との百卒長からの傳言を齎せる者に行き遇ふた。イエスはかゝる信仰はイスラエルの中にも見しことがないと云はれて、直にその病者を癒し給ふた。此奇蹟と直ちに前後して、カペナウムから二十哩餘を隔てたるナインといふ所の寡婦の子を死より甦らしめ給ふた。施洗者ヨハネが獄中から二人の使者を遣はして、「來るべきものは汝なるか、或は他に待つべきか」とイエスに問はしめたのは、恰かも癒の是等の奇蹟が人口に宣傳せられた時であつた。主は使者をして歸りて其見聞をその師に告げしめた。即ち「盲人は見、跛者は行み、癩病人は潔り、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧者は福音を聞せらる」と。使者の

去るに及んで主はヨハネの偉大絶倫を證し給ひ、又自ら多くの力ある行をなし給ひしコラジシ、ベツサイダ、カペナウムの邑々を責め給ふた。

罪人なりし婦

此後久しからずして主はシモンと名くるバリサイ人から食事の招待をうけ給ふた。主が行きて、食卓に就ける時、土地で悪い風評のある一人、泣きながら主の後に來り、主の御足に香膏をぬり、接吻し、髪の毛を以てこれを拭ふた。シモンはイエスが此くの如き婦の觸るを許すを訝つたので、主は二人の負債者の譬を以て、シモンを責めて後、女を顧みて、汝の罪は免されたれば、安心して行けと命じ給ふた。

此後主と其の使徒等とは、行く／＼病者を癒し道を教へつゝガリラヤの町々村々を巡廻し給ふた。主の人は民の中に増し行きしが、エルサレムより下りし學者とパリサイの人々の反抗は次第に度を加へ、主が啞なる悪鬼につかれし者を癒し給ひしに及んで、彼等は公然主の異能を鬼の王ベルゼブルに歸するに至つた。恩寵の御行を此くもサタンに歸するのには主が嚴かに警め給ひし如く、聖靈を瀆すに近きものである。主が警を以て教ゆることを始め給ひしは此の頃からで、主が病者を癒された或る日の午後か暮かに、汀から少し離れた小舟に坐して、『播種者』、『麥と毒麥』、『ひそかに成長つ種』、『芥子種』、『隠れし寶』、『商人と眞珠』、『漁網』などの譬を語り給ふた。

その日の夕暮、湖の東岸に渡らんとするとき、俄に暴風が起つた。イエスは舟の舳に寝て居られたが、恐惶狼狽した弟子たちは主を喚び起した。その時主は起きて『風と海とを禁め給へば、共に鎮りて風と』なつた。かういふやうにして主は徐々と其の弟子を、如何なる危険に際するも主を信ずるやうに訓練し給ふた。

鬼に憑かれたるガダラ人

湖の彼方に達した時、其の地方の岩穴を住居として、あたりを往來する者の恐怖となつてゐた所の、猛き鬼に憑かれたものに出逢はれた。鬼はイエスを『至上神の子』と認めてその前に跪いた。名を問はれた時

に、その憐むべき人は多くの鬼に憑かれたれば『レギオン』といふと答へた。そしてその悪鬼等は底なき地獄に行かしめ給はされ、豚の群に入りしめ給へと願ふて、許された。その故に悪鬼の入りし豚は坂を駆け下りて、湖に入つて死んだ。此の事近隣に傳はりて人々恐れあひ、集り來りし人々、いやされた人が『衣服を着け、たしかなる心にて、イエスの足下に坐し居る』を見、直に此の地を去らんことを主に求めた。イエスはその要求を容れられたが、主と共に居らんことを願ひし癒されし人には、歸りてその郷黨に神の行ひ給ひし大いなる事を告げよと命じ給ふた。

ヤイロの娘。血漏に悩める婦

此の大いなる奇蹟の後、イエスは湖を西岸へ横断し給ふた。すると小き娘の瀕死の大患に悩めるヤイロといふ會堂（カペナウムのならん）の宰が、來りてその娘を癒し給はんことを願ふに逢ふた。

その途中、主に尾行して來た群衆の中に、十二年も血漏に悩める憐れな女性があつた。その女は群衆に押されて、主の背後に來り、その衣の裾に觸りて、さしもの病の直ぐ癒えたるを感じた。イエスは能力の我身より出づるを覺えられて、顧みて『我に觸りしは誰ぞ』と言ひ給ふた。唯群衆の雜沓にのみ心を奪られて居た、ペテロや他の者共には、その問は意味もないものと思はれたが、主は『我に觸りし者あり』と言ひ張られたので、憐れな婦は終に慄へながら進み出で、我が所業なるを告白し

た。これを見られたイエスは敢て譴むることをせず、反て婦を勵まし、『むすめよ汝の信仰なんぢを救へり、安らかに往け』と言ひ給ふた。

その時使の者ヤイロに來りてその娘の既に死にたることを告げた。けれどもイエスは重ねて信仰を堅めさせ、弟子等と偕にその家に行き、着や否や、雇はれて居た哭者等を去らしめ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に唯その子の兩親のみをつれて、室に入り、娘の手を取りて、起よと命じ給へば、魂は直ちに娘に戻つて來た。主はその兩親に、この事を人に告るなと命じ給ふたが、かばかり大いなる奇蹟の隠れてあるべきやうもない。その名聲があまねく其地に播つた。

茲に主の傳道の第二年は終りたるものと思はる。

六 宣教の第三年 (上)

再びナザレにて棄てられ給ふ

紀元二十九年一月

主の公けの傳道の第三年はその故郷、その幼時の家なるナザレを重ねて訪れ給ひしことを以て始まるやうに思はれる。主はナザレにて會堂に入り教へられしに、聽衆は其の教に驚かされた。然し彼等は一年前の場合のやうな反抗は爲なかつたが、主の出處の卑しいのに躓いてしまつた。彼等は此は木匠にあらずや、マリアの子にあらずや、如何にして此の人にかくの如きことあるか

を問ふた。主は彼等の不信仰を奇しき驚き、たゞ數人の病者を癒したまふた後、再びナザレを去られて、繞りの邑々を教へつゝ、巡廻し給ふた。使徒等を召して、惡鬼を逐ひ出す能を與へ、「汝ら異邦人にも、サマリヤ人にも往くな、唯イスラエルの家の迷へる羊に往き、天國の近づけるを宣べよ」と命じ給ひて、二人宛道はされたのは宛かも此の當時である。於是彼等は幾週の間諸所の邑々に教を宣べ、病を癒しつゝ、傳道に出歩いたことと思ふ。

施洗者ヨハネの死

その頃、數月の間幽囚の身なりし施洗者ヨハネはヘロデの命によりて

首斬られた。ヨハネはヘロデがその兄弟の妻をもつことの正しからぬことを責めたのである。

これより前ヘロデの誕生日に、サロメは王の前に舞を舞ふたが、王は求むるものは何にても與へんと約した。淺はかな少女は母に唆かされて施洗者ヨハネの首を求めた。そこで命令が下りヨハネは首斬られたのである。ヨハネの弟子たちは師の死骸を葬るや、來りてそれをイエスに告げた。主はベツサイダ・シユリアス附近に湖を横ぎつて行かれた。

食を五千人に與へ給ふ

使徒等は同じころ其傳道から主のもとに歸つて各自その行へること、

教へしことを主に語り告げた。

第三の過越
紀元二十
九年四月

頃は三月か四月ころで、過越の祭も近付いて居た。けれどもイエスは此の時はエルサレムには御上りにはならなかつた。然し群衆は周囲の町々村々からベツサイダへ來り、主の所へ來たが、無論それ等の人は大部分は過越祭に上る途中のものである。『牧ふ者なき羊の如き』此の群衆の有様を見て、甚く動かされ給ふた主は、その人々に教へ、又その中の病めるもの共を癒したまふた。これと前後して各福音記者が何れも録して居る食を五千人に與へ給ふた奇蹟が行はれたのである。群衆が食に飽き、その餘屑をも拾ひ集めたとき、彼等はイエスを取りて王とせんと望んだ程にも彼等の熱心は燃

えあがつたのである。然し主は弟子たちをして再び湖を横ぎらせやうとして、これを船に乗らせ、群衆を去らしめ、御自分は獨り祈のために山に退き給ふた。

偶々その夜暴風があり、向ひ風なので、舟を漕ぐに難儀ひとかたならず。かれこれ夜の四時頃即ち曉方に、彼等は主イエスが水の上を歩み來られるのを見て恐怖を抱いた。聖マタイ傳記者は、ペテロがイエスの御許まで水の上を歩み行かんことを求め、その願を許されたが、信仰を失ふと共に沈みかけたので、イエスは手をとりにて彼を扶けたまふたことを書いてをる。かくて弟子たちは主を舟中に迎へ、風も鎮まり、その目的地に直ちに着した。船にをりし者近よりて彼を拜し言ひけるは、『眞に

汝は神の子なり』と。

五十六

次の安息日にカペナウムで、主は『生命のパン』に就き大説教をなし給ふた。約一年程前にニコデモと語り給ふた時に主は洗禮の聖奠を預表し給ふたが、今や主は古來定説とされてをるごとく、パンの奇蹟をば聖餐に關して教へたまふ題材となし給ふた。主は自ら生命のパンなりと宣ひ、『若し人の子の肉を食はず、その血を飲まざれば汝等に生命なし』と語り給ふた。

或者はそれを咎めだてしたが、主はその言を改め給はざりしのみならず、反て聞く者に、我が肉は眞の食物である、我が血は眞の飲物であると確めたまひ、凡そ我が肉を食ひ我が血を飲むものは永遠の生命をもつ、

我是れを末の日に甦らすべしと一層力説せられたまふた。

これ實に難解な言である。多くの者は主を棄てた。主は十二使徒を顧み、『汝等も去らんとするか』と問ひ給ふた。その時ペテロは衆に代つて、『主よ、われら誰に往かん、永遠の生命の言は汝にあり』と言ふた。

サイロピニケの女

此の大なる日の後、パリサイの人々の反抗の加はれるためか、主はガリヤラの山々を越えて、北の方ツロとシドンの境に向ひたまふた。サイロピニケの隣むべき婦が来て、その娘の癒されんことを主に請ふたのは

五十七

此處である。初め主は黙し居給ふたが、更に熱心なる求めに對して、イ
 スラエルの迷へる羊の外には遣されずとて、これを拒み、「子供のパンを
 取りて小狗に投げ與ふるは善からず」とて詰るが如くに之に答へ給ふた。
 然るに婦は何をも顧みず、「然り主よ、小狗も主人の食卓より落つる食屑
 を食ふ也」とて、撓まず祈つた。主は終に、「婦よ汝の信仰は大なるか
 な、願ひの如く汝になれ」と云うてその願を容し娘を癒し給ふた。

暫く此の地方に滞在の後、主はデカポリスを過ぎて、ヨルダンの流を、
 ゲネサレの湖の彼方まで溯られ、その地方で、豊にして啞なる人や
 多くの他の病者を癒し給ふた。

主は此の地に於ても、僅かの魚と七ツのパンとを以て、集ひ來りしデ

カポリスの人、婦女と小兒とを除きて、四千人に食を與へ給ふた。かく
 て後主は湖上を横ぎりてダルマチアとマグダラへ往き給ふた。パリサイ
 とサドカイの人々は、その時主に徴を求めたのであるが、預言者ヨナの
 徴の外に主は何をも與ふることを拒み給ふた。

聖ペテロの告白

恐らく僅か數日乃至數週の滞在の後、主は再び湖を横つて東岸なる
 ベツサイダに着き、そこに一盲人を癒されて後、弟子達と偕に北方に
 出發し、カイザリヤ・ピリピの境に着し給ふた。主が甚だ唐突に其の弟
 子に「人々は人の子を誰といふか」と問ひ試み給ふたのは此處である。

弟子等は、或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人なりと云ふてをると之れに答へた。すると主は、それなら汝等は我を言ひて誰とするかと問ひ給ふた。之れに對して聖ペテロは他に代つて、『汝はキリスト、活ける神の子なり』といふ記憶すべき答をなしたのである。主はこれを聞かれて『バルヨナ、シモン汝は福なり、汝に之を示したるは血肉に非ず、天に在す我父なり』と答へ給ひ、進んで、此岩の如き人ペテロの上に、即ち岩の如き、此の神性の告白の上に、我わが教會を建てんと宣ひ、又ペテロに『繋ぎ』又は『釋く』ことの權を賜ふべしと告げ給ふた。この權は後、使徒全體に與へ給ふたところのものである。

受苦と復活
に關する初
めての預言

主がエルサレムに上ることゝそこにて長老や祭司長から多くの苦難を受け、死に處せられ、三日の後甦へるべき事を初めて弟子達に示し給ふたのは此の時である。

ペテロが主の受難に就いての主の語を難するや、主は儼然彼を責め、苟くも我に従はんと思ふものは、何人も其の十字架を負ひて主に従はざるべからず。主御自身にも、又主に従ふものにも、榮光に入るには受難の路を経ざるべからずと告げ給ふた。

七 宣教の第三年 (下)

變容貌

紀元二十九
年八月?

前章に記した出來事の六日後、主は三人の弟子(即ちヤイロの娘の復活を目撃した所の)ペテロ、ヤコブ及びヨハネを伴はれ祈せんとてカイザリヤ・ピリビに程近き或る山(恐らくヘルモン山ならん)に登りたまふた。その祈りたまふ時に御顔の貌常と異り御衣が白く輝いた。睡りに落ちて居た使徒等は、臆て超自然の光明に目覺め、イエスの御貌の變りしこと、又主一人ならでモ

一セとエリヤとが之れと偕に在りて、『イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のこと』を語つてゐた。

するとペテロは固有の性急な氣質から、我に三の廬を建てさせ給へと乞へる間に、雲が來て彼らを覆ひしが、その雲の中から聲ありて『これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聽け』と云ふを聞いた。かくて事終り、律法と預言者とを表はしたる、モーセとエリヤ最早見えす。恐怖に打たれた使徒たちは『イエス一人』の他は誰をも見なかつた。

彼等が山を下つて行つた時麓には、他の使徒等が激亢した群衆に圍まれをり、その中央には惡鬼に憑かれて癲癇を患へるみじめな子供を擁して立てる男がをる。その子供はイエスのところへ携へ來らるゝや、甚

しく痙攣し、輾轉して泡を吹いた。イエスは父なる人に何時の頃から斯くなりしかと尋ねたまひしに、『幼き時より』であると言へ、その子供の病的發作の恐ろしきことを説いて、側々人を動かす調子で『汝何か爲し得ば、我儕を憐みて助け給へ』と訴へた。すると教主は『爲し得ばと言ふか、信ずる者には凡ての事爲し得らるゝなり』と告げ給ひ、其の子の父は直に『我信ず、信仰なき我を助け給へ』と叫んだ。而してその信仰は酬いられ、イエスは悪鬼を責め、『此の子供を出でよ、重ねて入るな』と命じ給へば、悪鬼はその命に従つて出で、主は父にその子を返し給ふた。

使徒等は後、主に我等が悪鬼を逐出し得ざりしは何故かと問ふた。す

受苦と復活
に關する主
の第二の預言

ると主は、かゝる靈は祈禱によらねば逐ひ出すとは出来ぬと答へ給ふた。此事の後、主は南方カペナウムに再び旅し給ふた。主が棄られ、死し、甦へるべき事を再び使徒たちに示し給ふたのは此の時である。けれども使徒等は未だその意を解することが出来なかつた。カペナウムに着くや、主の御國に於て誰が大いなるものかとの議論が彼等の間に始まつた。

その時主は彼等を戒しめんとて、幼兒をとりて彼らの中におき、之れを抱きて、『若し汝ら翻へりて幼兒の如くならずば天國に入るを得じ』と告げ給ふた。なほ聖ヨハネが、主を信ずる者でないものが、悪鬼を逐ひ出すを見て、之れを止めたので、主は『止むな、我が名のために能力あ

る業を行ひ、俄かに我を譏り得る者なし。我らに逆はぬ者は我らに屬く者なり」と、聖ヨハネの誤れる熱誠を物柔かに責め給ふた。かくて又「迷へる羊」の譬を以て、悔改むる者のあるとき、天に如何なる喜あるかを教へ、「負債者」の譬により人を赦すべき義務を説き給ふた。

假 廬 の 祭

紀元二十
九年十月

さて茲に假廬の祭が近いたので、主イエスは道をサマリヤに取りてエルサレムに上らんとしたまふた。或る村に入りしとき、其處に住む者共が、主を受くることを拒んだので、ヤコブとヨハネとは主に天より火を村に呼びくだして焼き亡ぼ

さんことを乞ふたところ、主は弟子等の過激な熱誠を咎めたまひ、他の村に往き給ふた。その時エルサレムでは主が果して祝典に列席すであらうかと種々取沙汰をして非常に騒いで居た。主は終に宮に現はれて教へ給ふた。サンヒドリム（即ちエダヤ人の會議）の敵意は今や判然となり、主を捕へんとて、役人共を遣はしたが、皆主の教に威服せられて、「未だ此人の如く言ひし人あらず」と云つた。

主が生れながらの盲人を癒し給ふて後、これに己を神の子として啓はし給ふたのも此時である。

假廬の祭の後イエスは七十人の弟子を二人つゞに分ち、自ら到らんとする町々村々に遣はし給ふた。彼が「善きサマリヤ人」及び「富める愚

六十八
「か者」の譬を語り給ふたのも此時で、主は自らを「門」、「善き牧者」又「世の光」などと宣はれた。

宮 潔 の 祭

紀元二十九
年十二月

暫時ユダヤに退かれて後、主は宮潔祭を守らんとて、その年の十二月再びエルサレムに上り給ふた。其時主はソロモンの廊で質問者に圍まれた。彼等は何時まで主がメシヤであるや否やを懸案として置くかと尋ねた。イエスはそれに答へて我が汝等の間になせし異能を見れば明かだと宣はれたが、主に對する彼等の反感は、彼等をして石をとつて主を打たしめんとした程であつた。

紀元三十年
一 月

されば主は其處を退き、エルサレムを出で、直にヨルダンを渡つて、ベタバラに來たまふた。此處は初めヨハネが洗禮を施してゐた所である。此處では主は妨害なく教をなされた。「大いなる筵」、「失へる金子」、「迷へる羊」及び「放蕩息子」、「不義なる支配人」及び「富める人とラザロ」の譬は此の期間に屬するものである。

恰も此の時ラザロの病めるを傳ふるマルタとマリアの使が來た。主は此處に二日留まりて後、つひ近日もユダヤ人は主を石にて打ち殺さんとしたのではないかと弟子たちの諫止するをも意とせず、主はヨルダンを渡りてユダヤに往き、直にベタニヤに着し、ラザロを死より甦へらしめ

給ふた。此の大なる奇蹟は、ユダヤ人の宰等の敵意を益々募らす直接の原因となり、カヤバを長としたる一會議を開き、此の人の教は、國民を危うするものなれば（何となれば民は彼を取りて王となさんとす、此ては羅馬人の復讐彼等に臨むべきは明かなるを以てなり）、全國民の亡びんよりも彼一人を死に處するは時宜に合へりと宣言した。この時から會議は如何にしてかイエスを死に行はんと工夫を凝らしてゐた。

受苦と復活
に關する第
三の預言

けれども、イエスは其の時の未だ來らざるを知れる故、北の方エルサレムの東北に位するエフライムに退き給ふた。主は此の頃十人の癩病者を癒し、幼兒を祝福し、若き宰に『汝の所有を悉く賣りて貧しき者に施せ』と告げ給ひ、『葡萄園



ふ給し祝を兒幼トスリキ

に働く人』の譬を語り給ひ、死と復活に關する第三回の預言を十二使徒に告げられ、ヤコブとヨハネの母がその子二人と『爾の國に於て一人は汝の右、一人は汝の左に』坐せしめ給へと切願せるに對し、眞の偉大は奉仕と受苦の中にある、人の子の來れるも、事へらるる爲にはあらず、反て事ふることをなし、又多くの人の贖償として己が生命を與へ』んが爲であると説き給ふた。

今しも都を去りて約二閱月、過越祭は間近くなつたので、イエスは最後のエルサレム上りをなされて、東から聖都に近づき、エリコ附近で二人の盲人を癒され、一夜收税人の重立ちたるザアカイの家に宿り、神の國たちどころに現はるべしと思ふ謬想を訂さんとして『預け金』の譬

七十二
を語り給ふた。そして終に過越祭前六日、再び主はベタニヤの村に往
き給ふた。恐くはラザロ、マリア、マルタの家をも訪れ給ふたであら
う。

八 地上に於ける最後の週間

エルサレム入都。ユダの裏切

紀元三十年
四月

主がベタニヤに着せられたのは、金曜日で、主とその同
行者とが安息日を其處で守られたのは言ふまでもない。
そして土曜日の夜（即ち一週の初めの日）主は癩病人シ
モンの家で晩食をなされた。その節マリアは價貴き香膏を主の足に
注いだ。イスカリオテのユダ（と他のものと）は此は徒費なりと咥やい
たが、主はマリアの爲したことを稱讚し給ふた。

次の日、即ち後世『棕櫚の日曜日』と稱する日に、主は二人の弟子を遣はし驢馬の子を牽き來らしめ給ふて、所謂エルサレム凱旋入都と世に云ひ慣はせる事を行ひ給ふた。弟子と、多くのガリラヤ人と、節筵のためにはベタニヤに滞在せる人々に取り繞れつゝ、非常に亢奮せる中を、一行はオリブ山の坂道を進んだ。或るものはその衣を脱ぎて途に敷き、或るものは樹の小枝を伐りて途に敷いた。一行が頂上に近づくや、棕櫚の葉をかざし、『ダビデの子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者』と歡び迎へた。かく主をメシヤとして認むることを主は承認したまひ、民の此くよばはり言ふを止むるを拒みたまふた。

頂上に達し給ふた時、主は暫く其處に停まられ、やがて主を棄てん

としつゝある市を見て悲哀の涙を灑ぎ給ふた。かくて宮に入り、境内を見廻し給ふて、使徒たちと偕にベタニヤに歸り給ふた。

月曜日に主は果を結ばざる無花果の樹をとがめ給ふた。この無花果の樹は唯外觀のみの宗教と、墮落した道德とに包まれたエルサレムの都の有名無實が好く象徴されて居たのである。

月曜日

宮に入り給ひて主は三年以前に初めて來り給ひし時に爲されし如く、商賣人を宮から逐ひ出され、又盲人及び跛者などを癒し給ひ、子供等は主を讚美した。薄暮に主は再びベタニヤに歸り給ふた。

火曜日は殆んど質疑と論諍の日であつた。パリサイの人々は『貢をカ

火曜日

イザルに納むるは可きか悪しきか』といふ政治的質疑を携へ、サドカイ人は復活に就て愚且つ不謹慎な質問を携へて来た。學者は又『律法のうち孰れの誠命か大いなる』と主に問ふた。パリサイの人々が姦淫のとき捕はれし婦を主の許に連れ來りしも恐らく當日の事であつたらう。

最後にギリシヤ人が來てピリポに『君よ、われらイエスに謁えんことを願ふ』といふた。主はこれらの異邦人の來りしことに深く感動し、是等のものはさきに『我もし地より擧げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』と仰せられた、主の受苦の後に集め給はんとする異教徒世界の初穂であるとし給ふが如く見えた。

賽錢の箱に對ひて坐し給ひたる主は貧しい寡婦のレブタ二つを投げ入るゝを見られて、此の者は他の凡ての人々よりも多く捧げた、何故といへば『その乏しき中より、己が有てる生命の料をことごとく投げ入れたればなり』と云ひ給ふた。恐らくこの言は、主が宮にて語り給ふた最後のものではあつたかと思はれる。

ベタニヤに歸へる途中、主はオブリ山に長時間徘徊し給ふて、エルサレムの滅亡と世の終に就いて多く語られ、且つ『十人の處女』と、『タラント』と、『羊及び綿羊』の大なる三の譬を語り、更に審判に就いて語りたまふた。

水曜日はベタニヤで靜かなる一日を過し給ふた。これは全く無言の一

水曜日

日であつた。ユダはそのあひだに、銀三十にて、その師を賣らんと祭司長と密議を凝らしてゐたのである。

木曜日

(モオンチイ・サアステイと云ふ。誠の木曜日の義にして、由

木曜日

來は此の日に『我を記憶せんがために之れを爲せ』といふ聖餐式と、『汝等互に相愛すべし』といふ新しき誠の

與へられたるためなり)に、主は過越の晚餐をなされんとしてエルサレムの二階座敷にゐたまふた。晚餐をなされて後、主は弟子たちの足を洗はれて、謙遜の模範を與へ、又聖餐の前に心を潔むる必要を示し給ふて後、パンを取りて擘き、彼等に與へて云ひ給ふには、『これは我が體なり』と。次に葡萄酒の杯を取り、謝して後、弟子に與へて云ひ給ふには、

『これは新約の我が血なり』と。

此のあとで主は聖ヨハネ福音書に記載されたる、あの驚異すべき教談をなし給ふた。その中に主は自身を以て『道なり、眞理なり、生命なり』と説き給ひ、助主(或は慰主、即ち聖靈)の約束を使徒達になされ、互に愛せよとの『新しき誠』を彼等に授けられ、御自身は葡萄樹、弟子等はその枝なりと説き給ひ、弟子たちの逃げ散らんことを預言され、大祭司長の祈禱を捧げ給ふた。

ゲツセマ

眞夜半に程もない頃、聖歌(恐らく詩篇の第二百二十篇より

第百三十七篇)を驅ひて後、この一小團は食事の部屋を出で、峻しき坂路を下り、ケドロ河を渡り、オリブ山への路をとりゲツ

セマネの園にすゝみ入つた。

此の園にて主は將さに臨まんとする危機に處する準備を整へられたのである。使徒のうち多くは園の入口で待つてゐたが、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけは少しく離れて主に従ひ行くことを許された。然しその三人をも残されて主は少しばかり彼等と隔つた所に進まれた。その間は主の祈禱の言が彼等に聞えぬ程の距離ではなかつた。『父よ、御旨ならば此の酒杯を我より取り去り給へ、然れど我が意にあらずして御意の成らんことを願ふ』。三度主は此の祈を繰返し給ふたが、その激烈な苦痛より、汗は血の雫の如く地上に落ちた。聖ルカは此の時天使が現はれて、主に力を添へたと傳へて居る。

主が三度眠れる使徒たちのところへ來給ふたときには、既に勝利を獲られてゐたまふたのである。穩かなる信頼の心を以て、主は敵の近づくを待ち給ふた。

その時ユダは宮の衛兵數人と、一隊の兵士を率ゐたるロマの一士官とを伴ひ來り、イエスに近寄りて接吻した。園の入口の方へ歩を進めて主は『誰を尋ぬるか』と問ひ給へば、彼等は『ナザレのイエスを』と應じ、續いて主が『我はそれなり』と答へたまふや、彼等は主の從容迫らざる威嚴に撃れ後退して地に倒れた。爰に主は再び『誰を尋ぬるか』と問はれて後、穩かに身を彼等の手に渡し給ふた。聖ペテロは祭司長の僕を目標けて一撃を與へその耳を斬り落した。主はその傷を癒され、そして使

徒^とたちが皆^{みな}遁^にげゆくうちに主^{しゅ}は縛^ばしめられて、孤^{ひとり}榮^ま然^じ曳^ひかれ行^ゆき給^{たま}ふた。

九 受難より復活まで

審問。十字架。死。復活

第一回 審問

主^{しゅ}は先^まづ祭^{さい}司^し長^{ちやう}カヤバの舅^{しやうと}なるアンナスの前^{まへ}に引^ひ出^{いだ}され給^{たま}ふた。其^そ處^こにてその弟^{でい}子^しとその教^{をし}義^ぎに就^つき審^{しん}問^{もん}され、宮^{みや}の一^{いち}衛^ゑ兵^{へい}に口^{くち}を打^うたれ給^{たま}ふた。

次^{つぎ}に主^{しゅ}は邸^{やしき}の庭^{には}を通^{とほ}つてカヤバの許^{もと}へ送^{おく}られた。議^ぎ員^{いん}の全^{ぜん}部^ぶが、そこ^こに集^{あつ}まつて居^ゐた。けれども少^{すく}しの正^{せい}義^ぎだに示^{しめ}されなかつた。彼^{かれ}等^らは切^しり^ぎと『妄^{ばう}證^{しやう}』を擧^あげたが、主^{しゅ}を罪^{つみ}に陥^{おと}すべき何^{なに}事^{ごと}をも見^み出^{いだ}し得^えなかつたの

第二回 審問

で、終にカヤバは立つて、彼が果してキリストなるや否やを告げしめんとて、イエスに誓をさせた。イエスが其の然るを告げ給ふや、彼等得たり賢しと皆主を死罪に當るものとした。彼等の狂暴なる、或は主に唾し、或は撻ち、或は愚弄した。その間聖ペテロは祭司長の邸の庭に居たが、三度主を知らずと云つた。

第三回 審問

金曜日の六時頃、第三回の審問があつた。ユダヤ議會が主を死罪に行ふ判決を通過したところで彼等はロマの管轄下にあるので、かゝる判決の實行權を有してゐなかつた。そこで常例の如く、過越祭の間萬一を警戒するためにエルサレムに上つて來たポンテオ・ピラトの前に牽き行くことに決した。イエスが祭

司長や暴民に取巻かれてピラトの前に牽き出されたまふたのは朝の六時ごろで、彼等はイエスを告發して民を煽動し、又自ら王なりと稱ふるを認めたりと訴へた。然しピラトは自ら主に問ふた上で、民のところへ出で來て、彼には何等の愆あるを見ないと云ふた。是に於てユダヤ人は「彼はユダヤ全國に教をなして民を騒がし、ガリラヤより始めて、此處に至れる」者だと一層猛烈にイエスの罪を鳴らした。

第四回 審問

ピラト偶々ガリラヤなる言を耳に挾んだので、自己の責任を逃るゝ機會を捉へた。當時ガリラヤの總督へロデも亦エルサレムに居つたので、主は雜沓せる街々を過ぎ、罵り騒ぐ群衆の間を通りてへロデの許に送られ給ふた。これが主の受け

られた第四回の審問である。ヘロデは全く誠意のない人物なので、主は彼に一語でも答ふるを拒みたまふた。そのため主はヘロデとその兵卒に紫の衣を着せられて嘲弄され、ピラトの許に送り返へされ給ふた。

第五回 審問

再び主は第五回の審問、即ち最後の審問を受けるためにピラトの前に立ち給ふた。ピラトはユダヤ人に、自分もヘロデも彼には何の愆をも見ないのだと告げ、彼を放免せんことを仄めかした。けれども先づユダヤ人を宥めるために主を答刑にせんと提議した。それから過越祭にはユダヤ人の罪囚一人を放免するロマの習慣に説き及び、イエスを放免せんかと尋ねた。が、誰もこれには賛成がない。皆強奪殺人犯たるバラバの放免を欲し、再びイエスの



主イエスの審問

血を求めて騒ぎ起つた。ピラトはイエスを笞刑に處する命令に署名することだけ承諾した。

笞うたれ、傷けられて主はピラトによりて再び民衆の前に牽き出され給ふた。ピラトは『視よ、この人なり』、かくても未だ満足せざるかといふ。けれども憐憫の心猶生ぜず、彼等は十字架に釘けよと再び叫び出した。ピラトは『汝等自らとりて十字架に釘けよ、我は彼に罪あるを見ず』と云ふ。これに應じて民衆は又『我らに律法あり、その律法によれば死に當るべき者なり、彼は己を神の子となせり』と答へた。此の言に驚いたピラトはイエスを再び中に入れて問ふた。そして更にユダヤ人に惻愍の心を起させんと努力した。ピラトは彼を伴ひ出して云ふ、『視よ、なん

ぢらの王なり』と。再び烈しい叫びは起つた。『カイザルの他われらに王なし』『なんぢ若しこの人を赦さばカイザルの忠臣にあらず、凡そ自己を王となす者はカイザルに叛くなり』と。かくて終にピラトは三時間の躊躇の後、イエスの無罪なりといふ我が確信のありしにも拘らず、又審問中わが妻から警告のありしにも拘らず、イエスを十字架に釘くる命令を發した。

主は直に引かれて、市の門外なるゴルゴタ又カルバリと呼はるゝところ、で十字架につけられ給ふた。

主の十字架上の第一の御言は主を十字架に架けたるものゝための祈禱であつた。『父よ、彼等を赦し給へ、その爲す所を知らざればなり』。

主の第二の御言は悔悟の罪人を慰安し給ふたものであつた。『我誠に汝に告ぐ、今日汝は我と偕に樂園にあるべし』。

第三の御言はその聖母に對して『婦よ、視よ、汝の子なり』と云ひ、又その愛する弟子に對して『視よ、汝の母なり』と云ひ給ひし言である。

第四の御言は主の靈をも包んだ怖ろしき闇黒を示すもので、『わが神わが神何ぞ我を見棄て給ひし』といふのであつた。

『我渴く』といふ第五の御言は所謂十字架の肉體上の苦痛、その最も堪へ難き苦惱を示して居る。

時は恰度三時である。一切が將に終らんとして居る。第六の御言に於て主は地上に別れを告げて、『事畢りぬ』と云ひ給ふたが、最後に主は天

を仰いで、「父よ、わが靈を御手にゆだね」と、第七の御言を發して息絶え給ふた。

聖なる屍は、メシヤを十字架に釘けた此怖ろしい事に與らなかつたユダヤの二人の宰アリマタヤのヨセフとニコデモとが之を降して、ヨセフの庭の、岩を切り開いた墓に葬つた。ロマの警戒の兵士はピラトの命を奉じて付いて居る。墓の石は封ぜられた。

復活

安息日一日の休息の後、日曜日の朝早く、聖き女達の一隊は聖なる屍に香膏を塗らんとて、其墓に來た。墓に着くや、彼等は石の轉ばしてあるのに氣がついた。そして幻象に天使に會ふた。その天使等は、彼等に主の更生り給ひし事を語り、主の弟



復活のトリスト

子達にこれを傳へよと告げたのである。

ペテロとヨハネにこの事を告げたのはマグダラのマリアであつた。二人は直に墓に走け付けて、その肉體を卷いた布は、靈の體の脱け出た時に落ちたまゝ、又その頭を包みし手拭は未だその形のまゝであるのを見た時に、普通の方法で主の御屍が何人かに取り去られたのではないといふ事が解つた。

二使徒は怪しみながら去つたが、マグダラのマリアは未だ墓の邊にたゆたふて居た。その時イエスは彼女に現はれ給ふた。(始めは彼女にも解らなかつたが)これが第一の示現である。他の婦人達は少し遅れて來たが、イエスはこの人々に遇ふて、『安かれ』と云ひ給ふた。これが第二の

示現であつた。

第三に聖ペテロに現はれ給ふたとある。けれどもこれ以上詳しい事は分らない。第四にエマオに行く二人の弟子に現はれ給ふた。第五は二階座敷に集まつて居た時に十人の使徒達に現はれ給ふた其れである。その時主は『平安汝らにあれ、父の我を遣はし給へ如く、我も亦汝らを遣はす』と云ひ、氣を嘘いて『聖靈を受けよ。汝ら誰の罪を赦すとも其罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも、その罪といめらるべし』と云ひ給ふた。

これらは皆復活日の中にあつた事である。

第六はその次の日曜日に二階座敷で現はれたまふた時で、その時には使徒達は皆列席して居た。そして主はこれを疑つたトマスを信服せしめ

給ふた。

第七にガリラヤの湖邊で七人の使徒等に現はれ給ふた。その時主は三度主を知らずといふたペテロに、失つた故の位置を興へ給ふた。

第八には使徒達と五百人の兄弟達にガリラヤの山で、現はれ給ふた。

その時主は『往きて萬國の民に洗禮を施し、これを教へて弟子たらしめよ』と彼等に命じ給ふた。

第九には聖ヤコブに現はれ給ふた。

第十、即ち最後の示現は昇天の時である。その時主は使徒達をエルサレムより伴ひ出して、遙かにベタニヤまで導き到り、聖靈の恩賜の興へらるゝまで、エルサレムにて待つべしと語り、この恩賜を受けて後には、

全世界に主の證人たるべしと語り給ふて後、彼等を祝し、その祝するとき、彼等を離れて昇天し、雲は主を受け、其の聖なる御姿を蔽ひ隠してしまつた。

地上に於る主の御生涯終

大正十一年八月廿四日印刷

大正十一年八月三十日發行

著作兼
發行人

東京市京橋區竹川町十七番地

アイ・エツチ・コレル

横濱市山下町百〇四番地

印刷人

村岡 齊

横濱市山下町百〇四番地

印刷所

福音印刷合資會社

東京市京橋區竹川町十七番地

發行所

日本聖公會出版社

1911
8

終

